

クリティカル・シンカーを育てたい  
—ディベートで考える「動物の権利」—

佐古 孝義

Tips on How to Develop Critical Thinking Skills through Collaborative Learning

Takayoshi SAKO

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第2号 (2020年3月)

Journal of Educational Research  
Center for Educational Career Enhancement

No.2 (March 2020)

# クリティカル・シンカーを育てたい

—ディベートで考える「動物の権利」—

佐古孝義

(京都教育大附属高等学校)

Tips on How to Develop Critical Thinking Skills through Collaborative Learning

Takayoshi SAKO

Senior High School Attached to Kyoto University of Education

2019年11月29日受理

抄録：動物実験の是非について、クリティカル・シンキングに基づいた「パラメンタリー（即興型）ディベートを取り入れた討論型授業を通して、その恩恵を医療や美容、食など様々に受ける「消費者」として、改めて正面から考えてみることで、グローバル時代を生きる「エシカルでクリティカルな賢い消費者」となるために必要なことは何かを提示する。これは改訂学習指導要領が求める「現代的な諸課題に対応して求められる問題発見・解決能力等の資質・能力の育成のための教科等横断的な学習」の一例となることを企図したものである。

**キーワード**：クリティカル・シンキング，パラメンタリー（即興型）ディベート，主体的・対話的で深い学び，動物倫理，消費者教育

## I. はじめに

「ロジカル・シンキング（論理的思考）」や「クリティカル・シンキング（以下、CTと略記する）」「批判的思考」などという言葉が教育現場を賑わせているようになって久しい。私は、菊地建至（2015）に倣って英語教育の中で目指すべきCTを「早まることなく、細部にも関わって、複数の視点で、吟味し、問い、よく考える」知的な営みを指すものと（暫定的に）定義している。ではこのCTは、次期学習指導要領が目指す方向性と果たしてどのような関わりを持つだろうか？

平成30年告示の「高等学校学習指導要領 解説」の総則には、改訂の基本方針として「各学校においては、教科等の目標や内容を見通し、特に学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。以下同じ。）、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のために教科等横断的な学習を充実することや、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。」（文部科学省（2018: 4））とある。

では、ここにある「現代的な諸課題」とは何か？それに対応して求められる「資質・能力」とは具体的にどういう能力なのか？こうした問いに対する答えになることを企図して、本稿では、CTを生徒が実際に駆使しながら協働学習を進めてゆくことを意図した実践を、「主体的・対話的で深い学び」の一つの例として紹介したいと思う。

以下に示す授業は「パラメンタリー（即興型）ディベートを取り入れた討論型授業で、動物の権利について考える」ことをテーマとしたものであり、京都教育大学と附属高等学校が共同して研究開発を行っているグローバル・スタディーズの実践例の一つである。また、本授業は、京都府府民生活部消費生活安全センターが行う「消費者教育推進校事業」での実践を兼ねている。

## II. 課題設定の意図

私は、「現代的な諸課題」のひとつとして「動物倫理(Animal Ethics)」を取り上げることにした。動物倫理とは、人と動物との関係が本来どのようにあるべきか、また動物とは本来いかなる存在であるかといった問いについて、哲学的・倫理的に考究するものであるとされる。欧米ではすでに、動物に対する扱いについて、Animal Welfare や Animal Rights といった立場を巡って議論が蓄積されてきた。一方、現代の日本においても、野生動物による農業被害の問題、ペットの殺処分、災害時における動物の扱い、捕鯨問題など日本社会に生きる我々の動物に対するあり方が、グローバルな場面でも問われることが増えてきており、日本の将来にも関わる重要な課題となっている。今回は、動物実験の是非について（もちろん高校生（及び教員も）直接の当事者ではないが）その恩恵を医療や美容、食など様々な受ける「消費者」として、改めて正面から考えてみることで、グローバル時代を生きる「エシカルでクリティカルな賢い消費者」となるために必要なことは何かを問うことにした。

## III. 授業実践

### 1. 使用教材

MAINSTREAM English Communication II Second Edition (検定教科書) 増進堂 (2018)

#### — Chapter 7 Animal Intelligence

教科書では①「ヒトとサルはどちらがより賢いか」という問い、②アリストテレスの「自然の階段」という考えと、ルネ・デカルトやB・F・スキナーの動物に対する考えについて、③ゾウに関する従来の実験の問題点と現在の実験の方法について、④現在の科学者がヒトと動物を区別する壁を崩しつつあることについて、の4点を取り扱われている。教科書の読解・聴解を通じて、まずこうした論点に対して基本的な知識を得た上で、とくに③④の論点を発展させ、文献などでさらに知識を整理・拡充した（文献のリストは最終ページに掲げる）。これらの文献では、さまざまな立場から「動物の権利」についての賛否両論の議論がされている。こうした問題について、CTの手法を用いて原理的に批判的に考えることは、「エシカルでクリティカルな賢い消費者」となるうえで非常に有益である。また、追加の参考資料も生徒に読ませて、理解を深めることにした。

### 2. 指導計画（全7時間）

1～4時間目までで教科書の読解を終え、ディベート活動を実施した。

時	学習活動	評価基準（評価の観点）
5 6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献を通じた発展的な理解</li> <li>・賛成・反対の議論を組み立てる</li> <li>・チームわけとジャッジの決定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●知識・理解 動物実験の是非に関して、「動物の権利」を擁護する観点と「動物福祉」を掲げる観点の双方の論点を整理する。〈資料①〉</li> <li>●関心・意欲・態度 倫理的な論点について、可能な限り先入見を捨てて公平な視点でものを見ることが出来る</li> </ul>



一般聴衆であるジャッジが1人ないし2人加わる形式が一般的であるが、授業実施クラス的人数が37名であるため、以下の通り肯定側・否定側ともに4人ずつの8人+ジャッジが1人または2人とし、計4グループ(8チーム)で実施した。グループ分けは、英語力に極端な差が出ないように、成員の考査成績の合計がほぼ同じになるように設定し、上位5人(中には帰国子女が含まれる)をジャッジに任命した。スピーチの順番は下表の①~⑧の通りで行った。

〈資料②〉ディベートのルールとスピーチのフォーマットについて

それぞれのスピーチについて、詳細な注をつけたフォーマットを事前に配り、これに書き込みながらディベートを行うように指示した

肯定側(Affirmative)	否定側(Negative)
①肯定側立論 (1) ConstruCTive Speech(1) : 定義を行い、〈肯定する理由(1)〉を述べる	②否定側立論 (1) ConstruCTive Speech(1) : 〈肯定する理由(1)〉へ反論し、〈否定する理由(1)〉を述べる
③肯定側反駁 Attack Speech : 〈否定する理由(1)〉への反論+〈肯定する理由(1)〉再構築	⑤否定側反駁 Attack Speech : 〈肯定する理由(1)(2)〉への反論+〈否定する理由(1)〉再構築
④肯定側立論 (2) ConstruCTive Speech(2) : 〈肯定する理由(2)〉を述べる	⑥否定側立論 (2) ConstruCTive Speech(2) : 〈否定する理由(2)〉を述べる
⑧肯定側結論 Defense Speech : 〈否定する理由(2)〉への反論+肯定側が優っている理由をまとめる	⑦否定側結論 Defense Speech : 否定側が優っている理由をまとめる

※相手チームのスピーチ中に、質問やコメントを15秒以内で発言することができる。これをPOI(Point of Information)と呼ぶ。生徒には積極的にPOIをするように促した。

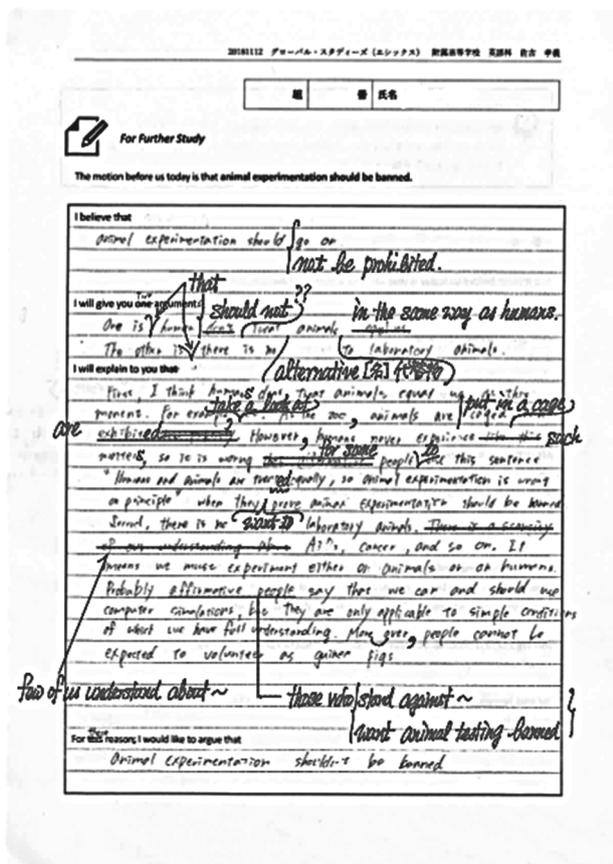
〈資料③〉

生徒の様子。授業は図書室(授業研究室)で行った。生徒は資料を調べたりしながら作戦会議をし、ジャッジの司会のもとで試合をした。ジャッジが勝敗とBest Debaterを決め、講評までを行った。



ディベート後はまとめとしてライティング活動に進んだ。グループの立場とは関係なく、自分で賛成/反対の立場を選び、Essay Writing を行う。(資料はグループで共有する。書ききれなかった生徒は家で完成させるよう指示した。その際に、当初の自分の意見が、ディベート活動を経て変わった場合、何がその決め手になったのかを考えさせるように注意した。

(資料④)



20181112 グローバル・スタディーズ (英語) 附属高等学校 英語科 1年生 準期

**思考のヒント**  
 動物実験に対する当初の自分の意見が、ディベート活動を経て変わったとすれば、何がその決め手になったのか。また変わらなかった場合は、どういう点で自分の意見をより強かなものと感じるようになったかを意識してみよう。

→ ① プラットで慣れた表現を元に Argument を構築するフォーマットを考えた

The motion before us today is that school libraries should have more comic books.

I strongly support this motion. ← 反対の場合は oppose this motion

I will give you one argument.

It is the academic usefulness of reading comic books. ※ 自分の Argument を読者の表現で説く(対外)

I will explain to you that reading comic books can and does help students with their studies.

My reasoning is as follows. 論拠を列挙

There is a wide variety of comic books in Japan, including the ones dealing with history or science. Surprisingly, you can also find comics whose main theme is on how to prepare for university entrance examinations. With the help of these kinds of comic books, studying has become much easier for students.

There is supporting evidence. 証拠を列挙

Though it may be hard to believe, according to one survey, at one school, the average score of the students who read manga regularly is much higher than those who don't.

This argument is important because a school library must be a place for self-study and self-study must be fun.

For this reason, I would like to argue that school libraries should have more comic books. 結論は conclusion 構文なし (or 否定)

↑ 論拠を列挙する

Essay Writing では、ディベートで使用したスピーチのフォーマットを援用して書くことを指示した。これまで学習してきたパラグラフ・ライティングの基本の復習となった。とくに

- 1) 主題文・指示文・結論文からなるパラグラフ構成を理解して書くこと
  - 2) 列挙・順序・対比・例示・追加・原因・理由・結果などを表すさまざまな Discourse Marker を使って書くこと
- の2点に注意するように指導した。

### 3. 評価に関する留意点

#### (1) ディベートの評価

上掲のディベート進行表にある通り、すべての生徒に何らかの役割が与えられ、役割別にワークシートが配布される。そのワークシートの記入度合いによって、ディベートへの参加姿勢を評価することができた。また、ディベート中の発話に関しては、英語でのコミュニケーション活動、特に自分の考えを伝えることを重視するので、内容面を重視し、軽微な文法的誤りに対してはマイナス評価をしない。

#### (2) ライティング課題

作文について、英語としての表現面に関しては、ディベート中の発話よりも文法的・語法的な誤りを厳しめにチェックし、訂正して返却した。特に興味深い意見についてはクラスで共有した。専門的な語彙はすでに教科書以外の文献読解で学習されているため、それを正しく作文中で用いることができるかも評価対象とした。内容面の評価は(3)に譲る。

#### (3) 内容に関する評価

動物実験に対する当初の自分の意見が、ディベート活動を経て変わったとすれば、何がその決め手になったのか。また変わらなかった場合は、どういう点で自分の意見をより確かなものと感じるようになったか、ディベート前後の対比を意識して書かせた。当然だが、賛否そのものを評価するのではなく、賛否双方の意見対立に関して、どこまでCTの手法を用いて原理的に批判的に考えることができたか、ということの評価の対象とした。

## IV. 結果

動物実験の是非についてディベートを行ってみて、生徒が問題にした主な争点は、「動物実験の実施によって人間が受ける恩恵」と「動物を搾取したり痛みを与えたりする残酷さ」とのバランスをどう考えるか、だった。「利益か倫理か」という二項対立と単純化してはいけないのかもしれないが、容易に結論が出せる問題でもないし、綺麗事だけですむ問題でもないということを生徒は再認識したのではないか。実際、ある生徒は「動物実験を全否定する論理を組み立てることは現状を考えると非常に難しい」と作戦会議中にこぼしていた。「科学(医学)の進歩」という美名の下で、動物の犠牲によって得られる恩恵を医療や美容、食など様々な面で受ける「消費者」であるわれわれが、改めて正面からこの問題を考えてみることは、「エンカルでクリティカルな賢い消費者」となるために正に必要なことではないかと実感した。

普段、英語の授業でたとえばこうした「消費者教育」の視点を意識することは少ないかもしれない。教科書の進度を意識し、教えなければいけない基本的な語彙や文法語法的知識の多さを考えると、毎時間立ち止まってゆっくりとCTする時間は確保できないだろう。しかし、一方で学習指導要領の改訂には、次のような記載がある。

「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」とは、多様な人々との対話の中で、目的や場面、状況等に応じて、既習のものも含めて習得した概念(知識)を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、課題を見いだして解決策を考えたり、身に付けた思考力を発揮させたりすることであり、「外国語で表現し伝え合う」ためには、適切な言語材料を活用し、思考・判断して情報を整理するとともに、自分の考えなどを形成し、再構築することが重要である(下線は引用者)(文部科学省(2018:12))

このような「内容面の充実」の要請に応えるためにも、英語の授業の中に、現代社会の諸課題を多角的・複眼的に捉える視点を導入する必要性は今後一層増してくるのではないだろうか。

以下は、事後の生徒アンケート結果をまとめたものである。

〈資料⑤〉 アンケート結果

●事前準備について

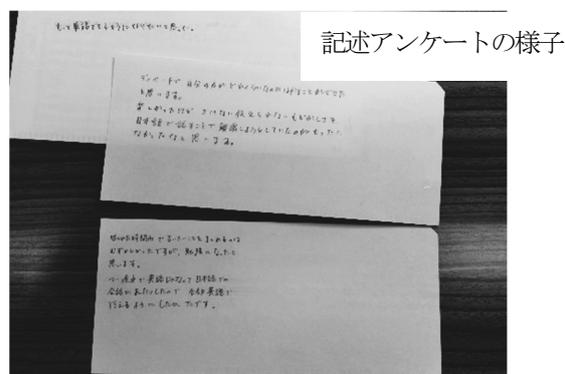
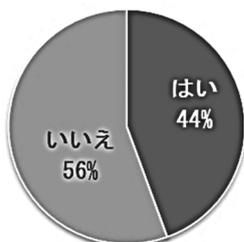
回答生徒：2年生36名

	とても難しい	やや難しい	どちらともいえない	やや簡単	とても簡単
「動物実験の是非」という題材そのものの難易度はどうでしたか？	5	25	6	0	0
2回の英文課題について難易度はどうでしたか？	4	20	12	0	0
	とても役立った	まずまず役立った	どちらともいえない	あまり役立たなかった	全く役立たなかった
2回の英文課題は、本番のディベートに役に立ちましたか？	18	7	9	1	1

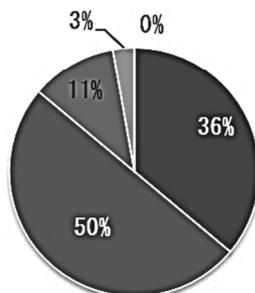
●本番のディベートについて

	大変よく出来た	よく出来た	どちらともいえない	あまり出来なかった	全く出来なかった
動物実験の是非について多角的な理解を深めることができましたか？	10	18	7	1	0
論拠を示して論理的に意見を述べることができましたか？	1	14	14	6	1
相手の話をよく聞き、論理的・批判的 (critically) に考えて意見を述べることができましたか？	1	8	17	8	2
決められた時間の中で自分の言いたいことを明確に述べることができましたか？	0	10	16	9	1
グループの人と協力して準備を進めることができましたか？	12	14	7	3	0
	大変深まった	まずまず深まった	どちらともいえない	あまり深まらなかった	全く深まらなかった
「動物実験の是非」という論題についての理解は深まりましたか？	13	18	4	1	0
	とても役立った	まずまず役立った	どちらともいえない	あまり役立たなかった	全く役立たなかった
あなたの英語学習にディベートは役立ちましたか？	12	15	8	1	0

これまでに英語ディベートを行ったことはありましたか？

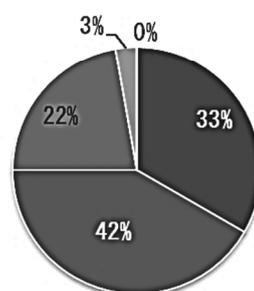


「動物実験の是非」という論題についての理解は深まりましたか？



- 大変深まった
- まずまず深まった
- どちらともいえない
- あまり深まらなかった
- 全く深まらなかった

あなたの英語学習にディベートは役立ちましたか？



- とても役立った
- まずまず役立った
- どちらともいえない
- あまり役立たなかった
- 全く役立たなかった

補足：記述アンケートの内容（上掲の写真）

- ・もっと英語ができるようになりたい。
- ・ディベートで自分の力がどれくらいなのかはかることが出来たと思います。楽しかったけど、きけない、伝えられないもどかしさを、日本語で話すことで解消しようとしていたのがもったいなかったなと思います。
- ・限られた時間内で言いたいことをまとめるのはむずかしかったですが、勉強になったと思います。つい途中で英語じゃなくて日本語での会話があったりしたので、全部英語で行なえるようにしたいです。

このアンケートで注目すべきは、非常に高度で倫理的な論題に関して、「大変理解が深まった」「理解が深まった」と回答している生徒が合わせて9割近くにのぼっているということである。事前課題として配布した英文資料(上掲)も非常に役に立ったようだが、これもディベートで使うという目的意識があったからこそであり、リーディングの技能についても一定の効果を果たしたと見ることができる。一方で、ディベート本番では、「即興性」という点においてまだまだ課題があることが改めて浮き彫りになった。「限られた時間内で自分の言いたいことを明確に述べることができたか」を問うた項目では、30%以下の生徒しか「出来た」と実感していないことが判明した。論理的に相手を説得する発言を「即興で」行うことは、生徒たちにとって極めて難易度の高い活動であるが、授業者による観察では、チーム内で助け合おうと協働する場面が多くみられたことは収穫であった。

また自由記述では、従来の(いわゆる文法・読解中心の)授業との違いを新鮮にとらえる回答が複数寄せられた(回答数11)。「限られた時間内で言いたいことをまとめるのはむずかしかった」「自分の思っていることを伝えるのは難(ママ)」といった難しさについて言及しているものがある一方で、「ディベートで自分の力がどれくらいなのかはわかることが出来たと思います。楽しかったけど、きけない、伝えられないもどかしさを、日本語で話すことで解消しようとしていたのがもったいなかったなと思います」「コミュニケーション力が向上したり、そっきょうで返す訓練ができる(ママ)」「英語を話す機会が少ないので、こういうものがあると良かったです」といった意見も見られた。これらは、まさに授業者が狙っていた「聞き手を意識するやり取り」の実践の意義が伝わった証左であると考えられる。伝えたい思いや考えに対して、適切な言語形式を与える力を生徒につけさせるために、表現・文法系の授業の中で我々が考えるべきことは何か、を改めて考える契機になった。

## V. 考察

こうしたディベートを取り入れた討論型授業を英語で行う効果は何かを考えてみると、次の点を挙げることができるだろう。

- 1) 自分の意見とは独立して客観的な事実を捉えることができるようになる(fact/opinionの区別がつけられるようになる)。
- 2) 相手のスピーチを傾聴することが何よりもディベートでは大切になるため、必然的に話す方も聞き手を意識し、聞き手も熱心に耳を傾けるようになる。
- 3) ディベートにおけるスピーチの「型」は、そのまま英文でのエッセイの書き方の基本的なフォーマットになっている。ディベートの練習をつむことで、ライティングの基礎的な技能を実践的に習得することが出来る。改訂学習指導要領は、「話すこと[やり取り]」に関して、「社会的な話題について、使用する語句や文、やり取りの具体的な進め方が十分に示される状況で、対話や説明などを聞いたり読んだりして、賛成や反対の立場から、情報や考え、気持ちなどを理由や根拠とともに話して伝え合う活動。また、やり取りした内容を踏まえて、自分自身の考えなどを整理して発表したり、文章を書いたりする活動」(文部科学省(2018:69))と示している。今回のディベート授業は、こうした次代の英語教育の要請への一つの実践となることを企図したものである。そして、この授業の根底に据えるべきなのがCTという思考の運動である、と私は考えている。

CTとは一つの論件を巡って考えうる限り様々な側面からよく吟味する複層的な協働作業である。ここで強調しておきたいのは、CTとは、論理的な探求や推論に関する〈知識〉とその運用の〈技術〉であると同時に、真理と問題解決を追求する「知的誠実さ」と、思考の柔軟性と他者の意見を尊重する「開かれた心」を持った〈態度〉を意味する、ということである(ゼックミスタ・ジョンソン(1996))。CTにおいて我々授業者が特に留意すべきことは、個々の能力よりはむしろ、主体的・対話的な学びを共有する場(環境)の整備である。

CTでは、リーディングのテキストの平面的な理解から一歩進めて、他教科の学習内容を援用したり、自分でリサーチさせてみたり、その他の読解素材に当たらせたり、自分で実際に試してみたり、そして何より自分が感じたことや考えたことを仲間と共有させる、という立体的な学習を試みるのが大切だと考えている。このような授業を通じて、果たしてCTの力は身につくのか、そしてそれを授業者はどのような形で評価する(べき)のか。道田(2012)がいみじくも指摘する通り、CTは技能というよりはマインドセットであり、むしろ他者の(そして自分自身との)〈対話〉という絶え間ない運動そのものを指すものではないだろうか。そう考えると、

授業者は、〈対話〉の外から生徒を傍観し、評価する者ではなく、自分自身がその〈対話〉の運動に絶えず関わってゆく者である（べきだ／はずだ）。この点を考えると、今回の授業を通して、内容面はもとより、授業のあり方に関しても何より授業者である私自身が学ぶことが非常に多い機会となったと考えている。

#### 参考文献

- ・菊地建至 (2015) 「クリティカルシンキング入門は、何をすることなのか (1)」, 金沢医科大学教養論文集 第43号, pp.29-49
- ・ゼックミスタ, E.B.・ジョンソン, J.E. (1996) 『クリティカルシンキング《入門編》』(宮元博章ほか訳) 北大路書房
- ・道田泰司 (2012) 『最強のクリティカルシンキング・マップ—あなたに合った考え方を見つけよう』 日本経済新聞出版社
- ・文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領解説 外国語編

以下は生徒に提示したものである。

#### 【動物倫理についての基本文献 (ディベートで主に使用したもの)】

- ・伊勢田哲治編(2013)『科学技術をよく考える —クリティカルシンキング練習帳—』名古屋大学出版会 ユニット9 「動物実験の是非」 pp.230-241
- ・Newman, D., & Woolgar, B. (2013) *Pros and Cons: A Debaters Handbook*. Routledge.
  - Animal Rights pp.13-14
  - The banning of animal experimentation and vivisection pp.115-116

#### 【追加の参考文献】

- ・伊勢田哲治, なつたか(2015) 『マンガで学ぶ動物倫理』 化学同人
- ・Sharon, M. K., & Thomson, P. (2007) *Philosophy for Teens: Questioning Life's Big Ideas*. Prufurock Press.
  - Chapter 10 Do Animals Have Rights? pp.89-98

#### 【その他 (教員が参考にしたもの)】

- ・伊勢田哲治 (2008) 『動物からの倫理学入門』名古屋大学出版会
- ・シンガー, ピーター (2011) 『動物の解放 改訂版』人文書院